

解云、象と熊とは、その膽四時に去たがひて、その在る所の異なるよしさへ、古人辨じおきたれば、右の月の輪の説などもことわり、或はさるよしあらん、去かれども猫と熊とはおなじかるべくもおほえず、めのをんなのわか、りし時、好みて黒猫をかひしこと、年ごろをふるま、に、その年、年にうませし子も、多くは黒猫なるをもて、これらのうへは、予もよく知れり、去かるに、黒猫毎に胸のあたりに、月の輪めきたるものあるにあらず、稀にはあるもあれど、そは黒白のぶちなれば、熊の月の輪に類すべからず、いかにとなれば、熊はすべて雑毛なく、猫には雑毛多ければなり、かかれは鉢石なる人の説も、ひたすらにはうけがたく、無冤録に載せたる説も、必とすべからず、虎は皇國になきものなれど、猫の事は知り易かり、大約猫の鼠をとるに、必先その、吭ドツエを拉きて、半死半生ならしめつ、弄ぶこと半時ばかり、既に啖はんとするにおよびて、必鼠の頂より咬ひはじめて、扱全身を盡くすものなり、或は巢たちせし雛鼠などをば、只一口にくらふことあり、或は多くとり得し時、又は大鼠にして、飽く時は、その頭頂より咬ひはじめ、その足より啖ふことは絶えてなし、こは予がさかりなりし時、凡はたとせあまりの程、いくたびとなく見し事なれば、遠く書をあさるに及ばず、もし疑ふ人もあらば、ためし見て、予が言の誣へざるを知りねかし、

附けていふ、猫の純黒なるものは、尤得がたし、その純黒と見えたるも、その毛をわけてよく見れば、必白きさし毛あり、よしや、さし毛なきものは、或はその爪の白く、或はあなうらの白きあり、かの藥劑に用ふといふ眞の純黒の得がたきこと、かくの如し、か、れば黒猫の胸の白きは、偶然たるぶちにして、熊の月の輪と異なり、

〔提醒紀談〕五猫の性鼠に去かず

ある人一疋の鼠を畜て、猫とともに居ら去むるに、日をふるま、に互にあひ馴れて、鼠も畏れず、猫も亦啖ふことを憶はず、却て鼠のま、なること愚なるもの、如し、思ふにその性のもとより